2　次は、二〇〇五年に書かれたｅラーニングに関する文章である。これを読んで、後の問に答えよ。　〈筑波大〉　二〇一六年度出題

　ｅラーニングに関する議論の中で、しばしば耳にする意見は「顔を合わせての授業でなければ効果的な学習は無理」というものである。確かに従来、本当に役に立つ講義は教室で先生から直接学ぶものだと考えられてきた。教室という場の雰囲気、先生の生の声、周りの同僚たちのささやき、そしてしばしば起こる予想外のハプニング。その雰囲気の中に我が身をおいてこそ、本当の学びは成立するのである。そして、レイファスも指摘するように、ｅラーニングは身体性が欠如したサイバースペースにおける学習であり、リアリティのある効果的な「学び」は期待できないのかもしれない。

　しかし一見疑いのないこの見解は、二一世紀においても絶対に正しいことなのだろうか？　私たち大人にとっては正しいと思えることでも、生まれたときから目の前にコンピュータが空気のように存在していたこれからの子どもたちにとっても正しいとは限らないのではないか？

　例えば、グーテンベルクが「印刷技術」を発明したときのことを想像してほしい。一番最初に印刷したのは「聖書」だったというが、これに対しカトリック教会や多くの信者から激しい批判があったらしい。手書きの聖書の方がキリストの教えをより正しく伝えている尊いものだ、という批判である。しかし、現在を生きる私たちは、そのような批判を「ばかげている」と考えるだろう。写し間違いがある手書きの聖書よりも、間違いなく知識を伝えてくれる印刷された聖書の方がずっとよいと考える。さらに、より多くの人々にキリストの教えを伝えるには印刷された聖書の方が都合がよいと考えるだろう。

　コンピュータやインターネットを用いて学ぶことは、現在のところ特殊なことと考えられている。しかし、あと数十年もたてば、ｅラーニングはごく日常的な学習スタイルになっているかもしれない。子どもたちが、ものごころついたときからインターネットで学ぶことが当たり前になったとき、ネット上のサイバースペースにこれまでとは全く異なるリアリティを持った「学びの場」ができるかもしれない。そして、子どもたち自身が、これまでとは全く異なるリアリティを持って、サイバースペースを「学びの場」とした学習を行っているかもしれない。

　また、確かに現在、ｅラーニングではリアリティのないバーチャルな「知」を扱うことが多い。しかし今後はバーチャルな世界とリアリティのある世界の境界線があいまいになってくることも考えられる。二〇世紀・工業化社会では「モノ」という概念が絶対的であり、その意味において物理的空間があるか否か、つまりバーチャルかリアルかの区別もはっきりとしていた。しかし、高度情報化時代になり「モノ」という概念がそれほど強力なものではなくなってきた。その代わりに「情報」という、とらえどころのない概念が支配的になりつつある。そこでは、どこまでがバーチャルでどこからがリアルであるかはもはや意味を持たなくなるかもしれない。さらに言えば、バーチャルな体験から得た知識と実際の体験から得た知識の差が、ほとんどなくなるかもしれない。さらに、その差を問うこと自体が意味をなさなくなるかもしれない。

　数十年後、子どもたちにとってサイバースペースがもうひとつのリアルな世界になり、インターネットを活用した「学び」という新しいリアリティが発生する可能性は否定できない。少なくとも、そのような可能性を頭の中においた上で、「学び」というものについて考えていくことが今後必要になってくるだろう。

　受験勉強にあけくれていた頃、目の前に山積みにされた教科書を眺めながら「これさえ覚えれば大学に入れる」と自分に言い聞かせていた。その教科書の何割を覚えることができたのか全く定かではないが、取りあえずその範囲内の学習を行い、希望の大学に合格することができた。

　受験勉強は、学習しなければならない範囲が決まっていた。その範囲だけ学習すれば、自分の目的を果たすことができる。しかし、人生というものに学習の範囲はない。自分のやる気しだいで、学習の対象となる範囲は無限に広がっていく。一昔前は、その範囲が広い人ほど知識人、あるいは博学として尊敬されていた。

　そして、これまでの教育や「学び」には大原則があった。正しい知識を簡単なものから複雑なものへ、ひとつひとつ系統的に積み重ねていけば立派な人間になれる――という前提である。これは学校教育に限らず、私たちがよりよく生きていくための「学び」の大原則としても広く受け入れられてきた。この原則の背景には、世の中には必ず正しい知識あるいは正解というものが存在するという思い込みがある。たとえ今、自分は知らないとしても、どこかに真実がきっとあるはずだ。だからこそ、一所懸命勉強して正しい知識を獲得し、それらを積み重ね、そして真実を見つけ出さなければならない。私たちは、今までこのように考えてきた。

　知識人とはたくさんの正しい知識を蓄積している人のことを意味したし、ビジネスを成功させるためには可能な限り多くの関連する知識を学ばなければならないとされた。そして、子どもを持つ親は、我が子が有名大学に入学し最先端・最高水準の知識を学ぶことを望んだ。

　このように見てくるとこれまで私たちはひとつの枠組みで「知」というものを捉えてきたことがわかる。ひとつの情報があるとする。それは、正しいか間違っているか……つまり、ふたつにひとつの明確な判断が可能なものである。そのような情報は積み重ねることもできるし、系統的に分類することもできる。間違った情報は無視したり捨ててしまい、正しい情報だけ受け入れればよいのである。

　ところが、現在は高度情報化時代。私たちの周囲を取り巻く情報の量はで、常に増大している。しかも、情報化社会はあいまいで複雑である。さまざまな情報が複雑に絡み合っており、また情報間の境界も見えづらい。あるいは、常に情報の意味やその情報自身が変化し続けている。ある時には正しかった情報が、次の瞬間には間違ったものとなる。「正しいとも言えるし、正しくないとも言える」という場合すらある。これまでの教育ではこのような情報は極力排除され、正しい知識だけが重視されてきた。特に、学校教育では間違ったことは教えられないし、正しいかどうかわからないことも取り扱うことは避けられてきた。

　そのような高度情報化時代の教育は、二○世紀の工業社会における教育とは必然的に異なったものにならなければならない。確かに、二〇世紀の工業社会では、「世の中には必ず正しい知識あるいは正解というものが存在する」という考え方が正しいように思えた。そして「正しい知識を簡単なものから複雑なものへ、ひとつひとつ系統的に積み重ねていく」という教育が、社会にとって好都合だったと言えるかもしれない。

　しかし現在、私たちの周りでは、そのような教育の欠陥がいたるところで表面化している。例えば、学びの場であるはずの「学校」で、「いじめ」や不登校、学級崩壊が問題視されてから多くの時間が経過した。その間さまざまな対処策が検討され実際に実行されてきたが、どうもいまいち効果は感じられない。

　そろそろ教育や「学び」に関して、少し本質的なところから検討し直す時期にきているのかもしれないこれまでの「正しい知識を簡単なものから複雑なものへ、ひとつひとつ系統的に積み重ねる」という常識を一旦白紙に戻した上で、改めて二一世紀の高度情報化社会における教育や「学び」を考えなくてはならない時期にきている。

（渡部信一『ロボット化する子どもたち』による）

〈注〉　ドレイファス＝アメリカの哲学者。

問１　傍線部分（１）「一見疑いのないこの見解」とは、どのような見解なのか、述べよ。

問２　傍線部分（２）「バーチャルな世界とリアリティのある世界の境界線があいまいになってくる」とはどのようなことか、述べよ。

問３　傍線部分（３）「これまで私たちはひとつの枠組みで『知』というものを捉えてきた」とあるが、どのような「枠組み」か、述べよ。

◎問４　傍線部分（４）「これまでの『正しい知識を簡単なものから複雑なものへ、ひとつひとつ系統的に積み重ねる』という常識を一旦白紙に戻した上で」とあるが、なぜ「一旦白紙に戻」すと言っているのか、本文の趣旨を踏まえて説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ真の学びとは、他者のいる教室の雰囲気の中に身をおいてこそ成立するものであり、Ｂ身体性が欠如したサイバースペースにおける学習はリアリティがなく効果的でないという見解。

Ａ＝５〔「身をおいてこそ成立する」という意味内容がなければ減点２。〕

Ｂ＝５〔「身体性が欠如した」という表現がなければ減点２。〕

問２　Ａ物理的概念が重視される工業化社会と異なり、Ｂとらえどころのない情報概念が支配的な現代では、Ｃリアルとバーチャルの区別や、そのどちらから得た知識かを問うこと自体意味がなくなるということ。

Ａ＝３〔「物理的概念」という意味内容がなければ不可。〕

Ｂ＝３〔「情報概念」という意味内容がなければ不可。「とらえどころのない」という意味内容がなければ減点２。〕

Ｃ＝４〔「区別」という表現がなければ減点２。「どちらから得た知識か」という意味内容がなければ減点２。〕

問３　Ａ世の中には必ず正しい知識があり、Ｂそれをより多く獲得し、系統的に蓄積することで、Ｃ真実を見いだすことができるという考え。

Ａの内容がなければ全体０。

Ａ＝４

Ｂ＝３〔「系統的に蓄積」という意味内容がなければ減点２。〕

Ｃ＝３

問４　Ａ内容や意味が常に変化する多数の情報が複雑に関係している高度情報化社会に生きている子どもたちにとっては、Ｂ知識の正否を確定し、正しい知識を系統的に学習するという工業化社会における学習方法は不自然であり、Ｃその欠陥は教育問題として既に表面化してきており、Ｄ学びの方法自体を考え直す必要があるから。

Ａ＝３〔「高度情報化社会」という表現がなければ減点２。〕

Ｂ＝３〔「工業化社会」という表現がなければ減点２。〕

Ｃ＝２／Ｄ＝２